

「さと も り いぬ里守り犬」の有効性を検証

命令に従い、黙々と動く日本犬

東京農業大学農学部 講師 増田宏司

野生のサル、イノシシなどは食物に困窮すると、山の麓の田畑に降りてきて農作物を食い荒らし、甚大な被害をもたらしている。そんな深刻な状況に対応して、ひとすじの光明として期待されているのが農水省の「里守り犬育成事業（鳥獣害防止総合対策事業）」だ。里守り犬とは、害獣のうち特にサルを追い、被害を最小にとどめることを期待されている犬達のことを言う。筆者は同事業の認定基準検討委員を務めて約3年になる。これまでの成果の一部を紹介したい。

主に甲斐犬を訓練

認定基準検討委員として求められていることは、「里守り犬認定基準設定に科学的な裏付けをすること」と、「里守り犬の有効性を立証すること」だ。

特別な訓練を受けてめでたく認定を受けた犬のみが里守り犬として活躍できるわけだが、特定の犬種しか里守り犬としての訓練を受けることが出来ないかというと、そうではない。訓練の場が山梨県ということもあって、ほとんどの里守り犬候補生が甲斐犬（日本犬）ではあるものの、中にはミックス犬や洋犬も訓練に参加し、うれしげに訓練課題をこなしている。

この里守り犬事業の面白いところは、里守り犬の飼い主は地域農家の人であり、その人たち自身が実際に自分の愛犬をインストラクターの指導の下で訓練し、犬と共にサル追いをするところにある。すなわち私たち認定委員会は、犬も飼い主も両方を訓練・教育し、認定しなくてはならないのである。

縄張り防衛性が高い日本犬

現在、犬の研究は世界中で盛んに行われているが、特に犬の行動特性に関する研究は1980年代頃から盛んに行われるようになった。特に注目すべきは1980年代半ばにアメリカで行われた調査であり、犬の専門家がポピュラーな56犬種について13種の行動特性評価を行っている。この調査において、例えば秋田犬は縄張り防衛性が最高ランク（10デシル）であり、番犬としては最適と判断される。しかし、今も昔も、家庭犬には人なつっこさが求められるから、その点でのイメージはどうだろうか。

日本での調査に目を転じてみても結果はまた同様で、多くの日本犬種は攻撃性、反抗性などの特性が洋犬に比べて非常に高く、反対に人なつっこさ、服従性

ますだ こうじ

1974年愛媛県生まれ。

東京大学大学院農学生命科学研究科博士課程修了。東京農業大学農学部バイオセラピー学科（伴侶動物学研究室）講師。獣医師、獣医学博士。

専門分野：動物行動学、行動治療学。

主な研究テーマ：イヌの行動に影響する匂い成分の同定、ペット同伴可施設における伴侶動物宿泊環境に関する研究。

主な著書：犬の幸せ 私の幸せ（単著）恒文社。



は非常に低いと酷評されている。また実際に犬の行動評価試験を行ってみても、日本犬種の成績は洋犬に比べて著しく低い、という話を多くの関係者から聞いている。

飼い主との相互関係を解析

里守り犬に話を戻す。里守り犬の育成はいくつかの段階に分けて行われる。ただの鳥獣害対策として犬を用いるならば、基本的には何ら訓練を加えなくとも彼らは勝手にサルを追うだろう。ただし、老人や子供も追ってしまうだろう。そうならないために、里守り犬にはまず初級の段階で一般的な家庭犬のしつけを施す。そして次の段階である中級以降に進級するに従い、より専門的な訓練課題に対峙することになる。例えばサルの匂いの付いた布などを農地に隠し、犬と飼い主がそれを一緒に探すなどの課題が用意されている。

実はこの時点で大きな難問が立ち上がる。里守り犬の認定基準に科学的な裏付けをする際にまず私が考えたことは「初級と中級の犬の課題成功率を比較すること」だった。しかし前述の通り、級が変われば訓練内容も変わるのである。単純な比較ができないのだ。ましてやインストラクターはそんな結果を求めてはいないだろう。課題がクリアできたと判断した上で犬達を進級させているのだから、より上級の犬達のほうが好成績を取めることは分かりきっている。そこで、里守り犬事業の特徴の一つでもある、「飼い主と犬が一緒